

ICTツールの活用で、 学習習慣の定着を

この連載では、全国各地の中学校でお聞きした、補助教材を活用しながら、生徒のみなさんの学力向上に向けて工夫されている取り組みをご紹介します。

第7回目となる今回は、進学教材の「新研究」と付属のICTツール「ちょいスタ」を使った、学習の習慣作りの実践をご紹介します。

事例

学習応援アプリの活用で
生徒が自らの学びを管理し
理解を深めるよう工夫

滋賀県での「新研究」+「ちょいスタ」の活用事例

： 学習応援アプリの活用で
 生徒が自らの学びを管理し
 理解を深めるよう工夫

滋賀県彦根市立鳥居本中学校

彦根市の東北部に位置する自然に恵まれた学校です。平成27年度より、鳥居本小学校とともに小中一貫型小・中学校「鳥居本学園」としてスタートしました。小中一貫教育として、小中教員による相互乗り入れ授業等の実施や、小学校高学年の一部教科で教科担任制による授業を行うなど、中学校とのなめらかな接続を図っています。ICTモデル校として、GIGAスクール導入以前から生徒用のタブレット端末を使用しています。



校舎全景と、本校のキャラクター「さんあかレンジャー」と生徒会役員。

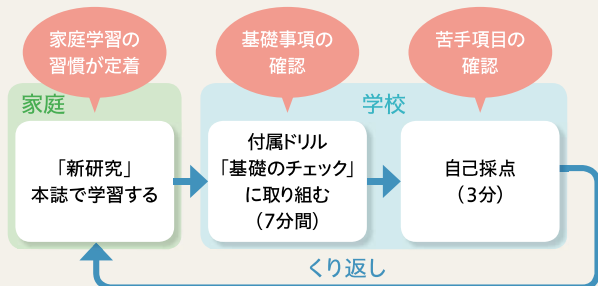
進学教材の活用方法

現3年生では、1年次の最後から2年次の初めにかけて、コロナ禍による休校期間があったことから、「基礎の強化」と、付属の「基礎の強化ドリル」を採用していました。「基礎の強化ドリル」は、取り組んだ後はノートに貼り、分からない問題の直し直しを指導していました。

2年次の2学期からは、例年行っている入試対策学習のため、「新研究」とその付属ドリルの「基礎のチェック」を採用しました。2年次の初めに「基礎の強化」でのテキスト学習による学習習慣の定着が図れていたため、「新研究」の学習にはスムーズに移行できました。

学習の流れは、まず宿題として「新研究」の本誌で学習し、次の日の帰りの会の際に「基礎のチェック」を配付します。10分間のうち、7分ほどで問題に取り組みした後、残り3分で自己採点を行います。取り組む教科は曜日ごとに変え、祝日等にあたっ

学習の流れ

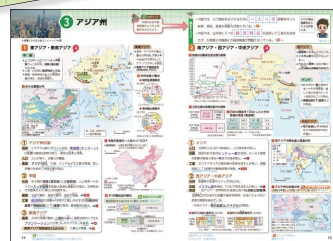


た場合、抜けた教科は家庭で取り組ませています。朝は読書の時間にしています。

基礎的な学力の定着には、このように、紙の媒体を使用する方が効果が高いと考えています。

新研究

中学3年間の学習内容を30単元に整理。基礎・基本の復習から入試対策まで、効率よく学習が進められます。



毎年入試を徹底分析して最新入試の良問を掲載。新傾向の問題対策も万全です。

基礎のチェック

「新研究」本誌の学習が短時間で確認できるドリル。朝学習などを活用した本誌の学習の確認・管理に最適。



中学校での活用実態

～新シリーズの学習応援アプリ「ちょいスタ」を使って～

「新研究」に新しく登場した学習応援アプリ「ちょいスタ」を、本年度から導入しています。「スケジュール管理」アプリには、生徒それぞれに、「新研究」の学習日と点数を入力させ、学習習慣の一層の定着と、生徒自らの自己管理をうながすことを目指しています。

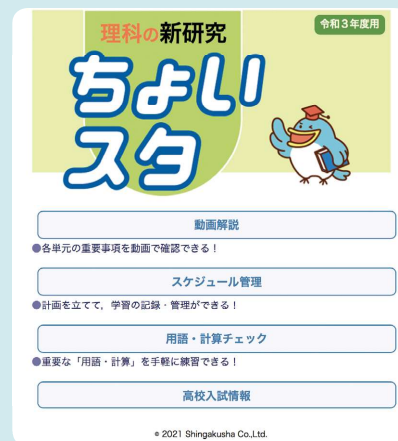
ただし、「ちょいスタ」に入力するよりも、直接ノートを提出したいという生徒もいますので、アプリへの入力か、ノートの提出か、自分に合った方法が選択できるようにしています。

生徒の中には、データを入力することで自分の学習の軌跡が蓄積され、振り返りに活用できることにメリットを感じる者が出てきました。このように、自分の成長の手応えを感じられる生徒が増えていくと、学習へのプラスの効果が期待できそうです。

活用が深まっている一部の生徒は、我々教師と「ちょいスタ」を介したコメントのやりとりも行っています。教師用に割り振られるIDは、管理を担当する複数の教師で共有しています。初めは不便に感じましたが、実際に運用してみると、この方が、生徒と教師間の閉じられた個人的なやりとりを防ぐことができると気づきました。生徒のコメントを最初に見て返事をした先生の後に続けて、他の先生が書

き込むことも可能です。

より多くの生徒がアクセスしやすいと感じるように、「ちょいスタ」のスタート画面を生徒用タブレットの起動画面に組み込んだり、ショートカットを置くなどの方法も考えたいですね。まだスタートしたばかりなので、生徒の活用の度合いはそこまで高くないのですが、夏休みに入れば、もっと活用の度合いが高まるでしょう。

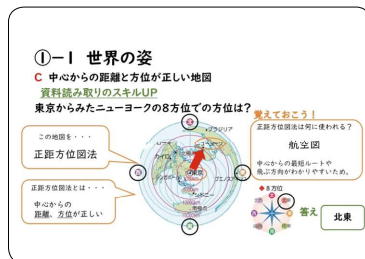


2021年度から「新研究」のラインナップに加わった、生徒用の学習応援アプリ「ちょいスタ」。「スタディプロジェクト（スタプロ）」を使う先生・生徒のための専用のWebアプリです。

活用しやすい4つのメニュー

動画解説

各単元の重要事項を動画で確認できます。いずれも「新研究」の解説に対応。具体的に動画で確認することで、イメージが明確になり、理解が進みます。



用語・計算チェック

各教科で重要な用語や定理などを手軽に練習できます。朝学習やテスト前、ちょっとした空き時間などを有効に活用できます。



スケジュール管理

生徒自身が計画を立て、学習の記録・管理ができます。記録したデータを振り返ることで、学習の蓄積や自らの成長が実感できます。



高校入試情報

動向が気になる近年の高校入試情報をいち早く収集・分析。効率的かつ効果的な入試対策を可能にするデータを豊富に用意しています。



タブレット端末活用に向けた今後の課題は

使用ルールの 確立・共有

生徒には、タブレット端末をどんどん使って学びを深めてほしいと思っています。しかし一方で、一定のルールや規則は設定しなくてはなりません。生徒の自主性を保ちながらも、どこまでセルフコントロールできるか見極めが必要となります。

この夏休み、彦根市内においては、生徒にタブレットを持ち帰らせています。使い方をガチガチに規制するこ

とによって、タブレットをきちんと使える生徒が使い方を広げることで得られる学びの機会を奪いたくありません。かといって、全くノールールというわけにもいきません。生徒会と引き続き話し合い、ルールの検討を行いたいです。生徒たち自身での節制力やデジタル・リテラシーを高め、内面から自制できるようにすることが大切になるでしょう。

アプリの活用は どこまで可能か

現在、タブレット端末へのアプリのインストールは、教師用も生徒用も許可制となっています。新たにアプリを入れたい場合は、市教委に申請書を出して許可を得なければなりません。

その場合、無料アプリよりも、有料の方が推奨される傾向にあります。というのは、何か問題が起きた場合、メーカーに責任をもってもらえるからです。Scratchのように全世界で活用されている実績があるアプリなら、無

料でも問題ありません。指導上使用させたいアプリが出てきた場合、どのように管理者と交渉していくかについては、一考の余地がありそうです。

ほか、彦根市では、児童生徒は同じタブレットを9年間持ち上がって使うこととなりますが、当校は小中一貫型の学校にもかかわらず、小学校卒業時に一旦返却し、小学校卒業後の春休みは家庭での使用ができません。このような点も検討が必要でしょう。

生徒にどう 定着させるか

タブレットの活用にすんなり慣れた生徒もいれば、一方で、スケジュールアプリにすらなかなか入力をしない生徒もいます。

今後、学校でのICT化はますます進みます。生徒間で格差が生じないように、苦手な生徒の興味を引くような機能をアプリに付加することも検討してよいのではないかと思います。生徒によって好みは様々ですから、思いつ

く限りの手を打つ必要があるのではないのでしょうか。

お話
いただいた
先生

中川昭典先生
(技術・数学・算数担当)

▶生徒に「ちよいスタ」
の活用をうながす
学年通信



紙とデジタルの活用イメージ

基礎・基本を底上げする



紙の教材は、教師が事前に内容を一覧できることが大きな強みです。つまずきや苦手項目がある生徒へのきめ細かい指導をしたい場合、該当する項目や問題がどこに掲載されているかがすぐわかります。また、答えだけでなく途中の過程が大事な方程式などは、紙の教材の方が向いているでしょう。

データを蓄積して 振り返りに活用する



生徒によるデジタル端末の利用により、生徒自身が学習記録を残すことができます。また、教師もデータの管理や分析が非常にスムーズになります。これまで見つけられなかった指導上の課題や改善点なども、客観的なデータを見ることが発見の一助となるでしょう。

習熟度に応じた 補充学習をする



紙の教材で基礎・基本を指導・演習したのち、生徒の習熟度に応じて個別の学習をするには、デジタルが向いています。得意な生徒は応用度の高い問題、苦手な生徒は関連する既習単元の基礎的な問題に戻るようなことは、デジタル教材でないとできないでしょう。

ノートやプリントを撮影して 共有する



授業中のワークシートの共有や、課題の提出などには、紙のノートをタブレットなどの端末で撮影し、データとして共有する方法が活躍します。さらに、動画や音声も送ることが可能になり、学習を深めるための素材のバリエーションが広がったことは大きな魅力です。



紙の教材とデジタル教材のそれぞれの良さをいかし、
バランス良く併用することで
スムーズで効果的な指導が可能になっていくでしょう。